

# 琉球大学学術リポジトリ

## みかんの生産費、需要、見通し

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): ミカン, カンキツ, 本部半島, 生産費, 労働費, 沖縄 キーワード (En): 作成者: 高宮, 巖 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015102">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015102</a>

# みかんの生産費、需要、見通し

高 宮 巖

(農 連 調 査 課)

1962年12月本部半島一円でみかんの生産費調査を行った。その報告の詳細は かんきつの生産費と栽培の実態 と題し、々農連資料5々として発表されている。以下は同資料からの引用といま少し書き加えたものである。

## 1、生産費

みかんの成木について8農家とインタビューしたうちから比較的正確な回答を得たと思われる5例についてまとめたのが第1表である。調査農家の選定は関係者からのすすめで行った。これらの農家は沖縄のかんきつ界ではいわゆる篤農家の存在で所有本数も一番多い方のことであつたが経営の規模はごく小さく、収穫できる本数で100本を超える農家はなく経営面積も10a内外であつた。本土の平均50々をこの篤農家の事例と比べると沖縄のそれがいかに小さいかがうかがえる。

第1表をきんみするまえにみかんの粗収入をみてみよう。種類によって異なるが一般農家で栽培熟の高いオート、カーブチー(両者は本当り収益で同程度と云われる)でみると10a当り360ドルとなる。算定の基礎は本当りの収量を24kg(40斤)とし600g当り12¢、10a当りの本数を75本とした。因に本当り最高で90~120kgはあると云われ、50年木などの老木を持つ人々の経験によると30~40年目が樹勢も旺盛で収穫が多いとのことであつた。

上記の360ドルをキビ及びパイんと比べてみよう。モデル農場の算定によると両者の年当り10a当りの粗収入

は18カ月のキビ夏植えて100ドル、パイんが72ドルである。みかんの場合栽培の周期をどうとるか何年目を収入の始めとするか詳しい検討を要するか問題を次のように簡略化して算定してみよう。1サイクルを20年、10年目から360ドルの収入があるとすれば年間10a当りの粗収入は180ドル( $= \frac{360 \times 10}{20}$ )となりキビより80ドル、パイんより108ドルもよいことになる。キビなみの100ドルを得るには本当り13kgの収量があればよい計算で、調査農家の平均24kgの約半分もあれば足りることになる。前記のように30~40年木が最盛期であることを考慮に入れると1サイクルを少なくともその範囲にもって行くことが適当と思われる。この場合1サイクルを30年40年と引上げるほど10a当り年間ベースの収入もよくなることは前記の式から明らかである。

360ドルを日本での粗収入456ドル(164,189円、36年度)に比べると\$96のひらきがある。10a当り収量では前者が1800kg後者が2900kgでその差さらに大きい。前者が篤農家の平均に対し後者が全みかん農家のそれであることに注意されたい。600g12¢に対し本土のそれを上記の数字から算出すると、1.1¢で将来島内産の量がまわるにつれてコスト引き下げ問題を提起するものと思われる。

上記の諸数字を考慮に入れながら今回まとめた範囲で諸経費の解釈及び比較を試みる。

第1表 調 査 結 果

	肥料費 (自給を含む)	薬剤費	施肥費	撤布費	除草費	しき草費	せんてい費	収穫費	労賃計
下 限	\$5.09	2.00	3.00 (2人)	3.00 (2人)	12.00 (8人)	16.50 (11人)	4.50 (3人)	12.00 (10人女)	
上 限	58.66	3.00	19.50 (13人)	10.50 (7人)	45.00 (30人)	52.50 (35人)	27.00 (18人)	21.00 (18人女)	
平 均	27.85	2.43	9.00 (6人)	4.50 (3人)	28.50 (19人)	34.50 (23人)	15.00 (10人)	15.20 (13人女)	106.70 (71人)

註) 労賃:男\$1.50、労賃女\$1.20、労賃計の71人は106.70を\$150で割ったもの。

みかんの生産費で一番大きいのは労働費(米麦のそのの2~3倍)であると云う。第1表で労働費は\$106.70となっているがしき草費と除草費は代換的なもので、しき草を徹底すれば除草はいらないと云う性質のものである。調査農家の殆んどがしき草に力を入れているのでいま\$106.70から除草費\$28.50を除くと\$78.20でこれを内地の\$66(23,806円)に比べると\$12.20のひらきがあり、さらに上記の収穫の差を考慮に入れると沖縄の労働生産性の低さがうかがえる。みかん600gを生産するのに労働費が沖縄で¥2.6日本で¥1.3で半分ひらきがでてる。

第1表の労働費中ずばぬけて大きいものはしき草と除草費である。将来管理を高度化した上でさらに労働費の節減を図るとすればこれら両者がまっさきにその対象となろう。土壌の流失防止と地力の増進をかねしかもコスト低減をねらう草生法の導入が望まれる。これは又畜産とも結びつきうるのではないか。

第1表には諸経費の分散の上限と下限のみを示してあるが、分散の度合が非常に大きいと云うのが特徴である。

これは表現をかえれば栽培技術のはなはだしい不統一を示すものであり、採算性と高度な技術に基礎をおく栽培法の早急な確立と普及が望まれる。

みかんの生産費で労働費に次ぐものは肥料費であるといわれるが、第1表のそれが\$27.85で内地の場合\$5271と大きくみかんは肥料でつくると云うことがうなづける。また今回明らかになったことはこれらの農家が有機質肥料(堆肥、けいふん、魚粉)に経費をかけ過ぎるということである。肥料費のうち\$8.87が無機質購入肥料にまわされているだけであり残り\$18強は有機質に当てられている。施肥量および回数面でいま一層の研究が必である。

## II、需 要

経済局農務課の調べによると現在沖縄でのみかん栽培面積は800で収量は480,000g(1本当り8gで10a当り75本)と推定されている。まず島内需要を充すことから始めることになろうが沖縄産で置きかえることのできる輸入ものの動向は次表の通りである。

第2表 みかんの国別年次別輸入状況 (単位 数量 kg・金額 \$)

		日 本	米 国	台 湾	計	指数(数量)
1955	数 量				1,776,474	100
	金 額				310,748	100
1956	数 量				2,289,003	129
	金 額				410,335	132
1957	数 量				2,740,914	154
	金 額				519,913	167
1958	数 量				2,963,821	167
	金 額				512,224	165
1959	数 量	3,319,160	400,117	15,384	3,734,661	210
	金 額	498,721	124,336	3,544	626,601	202
1960	数 量	3,784,265	314,754	—	4,099,019	230
	金 額	631,986	119,397	—	751,384	242
1961	数 量	3,662,531	398,688	9,000	4,070,219	229
	金 額	747,698	169,884	2,254	919,836	296
1962	数 量	3,360,043	512,373	9,400	3,881,816	219
	金 額	729,615	207,607	2,817	940,039	303

(注) 輸(移) 出入植物検疫年報1,2,3号及び植防資料より作成

第3表 みかんの国別種類別輸入状況(植防資料)

国別	種 額	1961			1962						
		数	量	金額	単 価	数	量	金額	単 価		
日	温州みかん	3,443,865	kg	703,359	\$	¢	3,142,718	kg	688,312	\$	¢
	三宝かん	80,743		17,659			25,096		7,616		
	夏かん	72,540		7,679			121,870		15,402		
	ボンカン	26,092		6,354			18,880		5,122		
	金かん	15,751		2,204			16,622		3,534		
	紀州みかん	7,585		1,992			34,385		9,408		
	ナルトみかん	2,735		543			(ネーブル 260)		87		
	イヨかん	1,000		280							
	ハツサクかん	563		123			100		23		
本	ゆづ	159		72			112		111		
	ネーブル	351,566		142,566			441,067		179,770		
	レモン	49,633		49,633			67,847		26,828		
国	グレーブルーツ	344		354			3,459		1,009		
	ボンカン	12,000		12,000			2,000		580		
台	タンカン	9,000		9,000			7,400		2,237		

第2表から読めるように55年から62年の8年間にみかんの需要は2倍以上にのびている。62年には100万ドルちかくのみかんが輸入されている。

60年から量の指数が減り始めているのに対し金額のそれは相変わらず上昇の一途をたどっている。その原因を第3表の61年と62年の比較でみると、部分的な単価の上昇もさることながら最も大きな原因はネーブルやレモンなど高級みかんの輸入増によるものと思われる。これは所得がのびるにつれて温州などの大衆みかんはむしろだか特に高級みかんの需要が大きくなるのびるであろうことを示す。普及種の選定に際し市場性に関して特に慎重をきさねばならないゆえんである。

第2表で最も輸入量の多かった60年の4,099,019kgに例をとり前述のオートー、カープチャー(24kg/本、75本/1(a))でおきかえるとすれば170,000本と28haの面積が必要でこれは現在の栽培面積800aの2.8倍でほぼ3倍ちかくに当る。第2表から需要量は平均年15%の率でふえておりこの率でいけば10年後には150%即ち現在の1.5倍になる計算である。この需要ののびを考慮に入れると前記面積の2.8倍は4.2倍になる。

### Ⅲ、将来の見通しと問題点

沖縄ではたしてみかんの栽培が有望か。結論を出すには早すぎるが、その見通しが決して悪いものでないことはその粗収入のキビやパインとの比較でも読めた。事実先進農家は地形的に能率の悪いパイン畑をみかんで更新する動きを示している。本当り取量で90~120kgと云う事例は取量増加の可能性を示すものであり、管理を高度化することで単位面積当り取量の飛躍的のびも期待できる。自然的立地で不利な面もあるがそれらは人為的に解決できるものと思われる。

需要のところで見てきたようにその見通しもむしろ明るい。所得の増加にしたがって農産物に対する消費の構造も変って行くことが予想され日本でも最近さかんに10年後(46年)の農産物需要見通しが検討され論じられるようになった。それによると一番の成長株は畜産物、次が果実類で現在の需要に対して2.5倍ののびが予想されている。沖縄も日本の消費構造の変化を追うだろうし、又日本での需要ののびは沖縄産にとって輸入ものとの競争という面で有利にならう。

自由化が激化すればキビ、パイン、米麦などの一般作

物のように輸送加工のきくものは適地適作で次第に経済的自然的立地のよい方へその生産が局限されていこうが、鮮度を要求される農産物の生産は比較的完全に地方に残るのではないか。その点これらの農産物の開発利用が真剣に考えられてよいし、そう云う意味でみかんも大いに検討を要する。みかんは単にローカルなものとしてだけでなく、沖縄の立地を生かした独特なものの生産に成功すれば、輸出入又は加工用として産業化する可能性をも内包するからである。

以上生産（農家）の面でも需要（消費）の面でも見直しはむしろよい方で要は如何にしてそれを採算のベースに乗せるかと云う方法々の問題と云うことになる。

解決すべき複雑多岐な問題が山積されておりその採算性についてもいま一層の究明を要するがそれらの問題を要約してみよう。

1. 品種の選定
2. 技術の確保
- 38 普及
4. 販路の開拓

市場性及び自然条件を考慮に入れた明確な品種の選定基準を設定することがまず第一の仕事であろう。その基準にてらして普及種を厳選すべきである。有望と思われる種類も2、3あるがその論述は次の機会に譲ることにする。

厳選された品種を着実に採算のペースに乗せらるだけの高度な技術を確保し体系化することが次の仕事である

ら。必要とあれば技術者の導入も考えられる。モデル農場の利用などもその一つとしてあげられよう。

普及する側、される側を動員して最も効果的で能率的な普及体制をととのえる運びとならうがその際問題になるのは受け入れる側の経営の形体（専業的、副業的、協業など）及びそれへの移行過程をどうするか、また技術的にはむろん経済的な対策をも含む普及体制が問題とならう。

市場性及び用途の開拓面でいま一層の努力を要しよう。パイプ工場の閉鎖期を利用するジュースの加工なども決して夢ではないようである。沖縄には生食用・加工用ともに有望だと思われる種類があり、かんきつの権威者である田中長三郎博士は羽地みかんを寛皮かんきつで到達しうる最高の品質と述べ特にその沖縄での無核種の発見の事実をあげその産業化を力説している。氏によると羽地みかんは耐寒性があるため関東あたりまでつくられるが温熱不足のためとうてい沖縄なみの品質は作り出せないとのことであり該みかんは沖縄、独特のものとなる可能性をそえるものであると思われる。

#### 参 考 文 献

- 1) 農林省農林経済局統計調査部1963、昭和36年産重要農産物生産費調査報告
- 2) 農林大臣官房企画室監修、農林統計協会刊1962、10年後の農業技術
- 3) 田中長三郎1957、琉球の柑橘、琉球政府経済局刊